

トラック 308～310：コモロ人の歴史学者への聞き取り（パリ・イタリア広場）

[コモロにおける] 戦国時代のことを話そうと思う。最終的には、同じ時期にヨーロッパでは 600 万人が殺された。この「戦国時代」という語は 1942 年のある入植者の本の中に出てくる。同じ頃にユダヤ人の虐殺があった。我々の方ではスルタンたちは戦争をするしかなかったのだけれど、死者の数は多分 15 人か 12 人程度だった。

—— 多くはないですね。

多くはない。それにこの「戦国時代」という語があったとしても、戦闘が実際に始まったのは植民地期だった。つまりフランスがやって来た時期に当たり、彼らはサイイド・アリのクランに肩入れして、ンガジジャ島全体に味方を置こうとした。ところがそれはうまくいかなかった。それ以降、戦いが起こったわけだ。[コモロの] 伝統として、それぞれのスルタンが領地を所有しており、彼らはお互いに多くのスルタンのうちのひとりのスルタンであると認め合っていた。ところがフランスがやってきてからは、フランスというのは伝統的に中央集権化を行うので、支配者がひとりいけばいいことになる。一人の王がいればよく、53 人もスルタンはいらない。そういうことで、サイイド・アリがヌガジジャ島全体を支配できなければならなかった。そこで戦いが始まった。しかしそれ以前には、私が思うには [戦いは] 殆どなかった。いずれにしてもそれについての研究は存在しないものの、人々が作り話をしている。

—— それが、史実がどうかを判断するには難しいところですね。不幸にして資料がありませんから。

ないね。多くはない。

—— 特に書かれたものは多くありませんね。

ほんの少しはあるにしても、多くはない。

—— それじゃ、どうやってあなたは本を書いておられるのですか？ それにどうやって研究をされるのですか？

それは簡単なことだよ。

—— ということは、人々に会いに行くとか？

そう、人々に会いに行ったし、資料についてもそこには書かれたものがある。私にとってさらに容易なことは、それが 20 世紀のことだということ。少し 19 世紀も入るにしろ、20 世紀のことになる。フランスの行政機関の文書があるし、モロニと同様ここでも、フォンテーヌブローやエクス＝アン＝プロヴァンスにもある。書かれた文書があるというわけだ。さらにもっと古いもの、例えば伝統に立ち戻るにせ

よ、植民者によって書かれた書物によるにせよ、それらがイデオロギー的な書物であるということを念頭に置く必要がある。それらの本を歴史書のように読むと、誤りを犯し、痛い目に逢うことになる。というのも、それらの書物、『スルタン戦士の諸島』や『ジュヴレのコモロ人試論』はいずれも植民者が書いたもので、植民者に都合のいいことが書かれているからだ。

—— つまり、あなたは植民者たちの物語には少し躊躇しているということですか？

そう、勿論だ。

—— それにもかかわらず、コモロ人たちによる話は多くはない。

いや、ある。書物を書いたスルタンたちがいる。

—— 私なんかは、自分の国の歴史を知りたいと思っているけれど、実際にはその区別をつけられない。私の考えていることは別として、多分誇張している植民者の方を結局は信じると思う。

それは幾らかみんなと同じだね。なぜなら、結局は『スルタン戦士』の書物を読むことになるし、誰も質問をしない。ところが実際には、その本を開いて数ページ繰るだけで足りてしまう。というのも、植民地化までのコモロの歴史全部が多分 10 ページぐらいにまとめられていて、続く 100 ページは植民地化されて以降のことだ。彼らが戦いについて話しているのはそこであり、つまり戦いというのは植民地化の間、植民地化の過程で起こったことになる。

—— 植民地化の過程と、植民地化の間のどちらですか？

植民地化の過程の間だ。その後でスルタンの間での戦いがより多く起こったのは本当のことだ。それらは戦いではあったにしろ、言葉によるものだった。ところが 19 世紀に、つまり 1880 年代の終わり頃、或いはその少し前から 1912 年にかけて本当にスルタンたちの間で戦いがあった。それはちょうど、フランスの介入、イギリスの介入、ザンジバル人の介入、そしてザンジバル人の裏にはドイツ人がいた。本当に戦いがあった。

—— そういう類のハディス [物語] は見つかりますか？

年代記がある。しかしそれは植民者のものと似たり寄ったりだ。それぞれの陣営がそれぞれの年代記を書こうとしているから、どれが真実でどれが作り話かを見る必要がある。

—— なるほど、その類の年代記は面白そうですが、私は個人的には、区別をつけられないと思います。いずれにせよ出来るとは思えませんが。

年代記と実際の歴史との区別をつけるということ？

—— そうです。これは本当ではない、もしくは、これは本当ではないようだ、というような判断が出来るとは思いません。私は、「これは本当ではないようだ」から先に展開させることも出来ないでしょう。私はそれを読んで、自分の考えにして、それで終わりです。

そう、わかるよ。というのも、私は以前特にアフリカで同じことを見た。どうやって、いつも互いに戦っていた野蛮人だったと信じ込ませるか、とかね。それをコモロに置き換えてみたらいい。アフリカと事情はそれほど変わらない。アフリカでは「我々 [植民者]のおかげで君たち野蛮人は殺し合いをしなくなった」と言われたから、コモロではさしずめ「我々のおかげで、戦うスルタンたちの争いは終わりだ」となるだろう。ところが実際には、目につくのは大規模な戦いだけであって、それはヨーロッパ勢力がやってきたまさにその時に起こったものだ。つまり、対立が激化したのはまさにその時なのだ。ところで幾つかの興味深い年代記があって、それはスルタンやスルトンの親族が、何が起こったかについて書いたものだ。

—— それはどこで見つかるのですか？

国立図書館。出版されたものもある。マヨット島については、グルーという大学教授が出版したものが幾つかある。私はその本を持っているけれど箱の中だ。とにかくあるということだ。FNAC に行けば年代記も幾つかある。それにシャマンガがグニエというもう一人と一緒にスワヒリ語の年代記を訳したと思う。要するにそういうものは見つかるということだ。だから [民話とは] 逆に書かれたものはある。

—— でも、年代記に関心ありますか？ あなたの民話プロジェクトに歴史の年代記は関係してきますか？

(小田) 勿論。

つまり、スルタンやその家族が、彼らのヴァージョンの歴史を書いているということになる。

(小田) 私はスルタン戦士の物語を少し集めました。

スルタン戦士の？

(小田) 二つか三つぐらい。

—— それはコモロ人が語ったものですか？ コモロで、或いはここで？

(小田) コモロ人によるものでマダガスカルで。

それは興味深いことだ。結局は、スルタンの歴史や戦いと呼ぶことについて知られていない多くの年代記があるということになる。だから、比較することができる。それぞれが歴史についてそれぞれの主張を持っているから。

—— 興味深いのはまさにそれです。

そう、しかしそれぞれが自説を展開したとしても、それが必然的に歴史というわけではない。今でもコモロの或る家族のところに行くと、「我々の家族はこうだった、ああだった、こうだった、ああだった」と聞かされることになる。それで君は思う、なるほどこれが家族の歴史だと。ただ、そういう風に教えられても、それは現実ではない。

—— 結局のところ、そうではないのですね。

それぞれが家族の歴史を持っている。今ではヌガジジャ島で、家族の中でそれぞれが歴史を持っているのだと思う。それで、君が話を聞いたり、文書まで持ち出してきた君に語ったバージョンを比較して、歴史を書きとめようとする時、彼らは君にあることないことを話す。

—— 実際には、聞いたこととはまったく違うのですね。

そう、まったくそうだ。あることないこと。私はサイド・モハメド・シェイクの歴史、つまりサイド・モハメド・シェイクの伝記を博士論文の中で書いたことがある。5年かかったよ。私はミツアミウリにある彼の家に行った。そこに一ヶ月滞在して年寄りたちに聞き取り調査をして、それからここで関連文書を読んだ。ところがその親族たちは決していい顔をしないんだ。

—— 何かに不満でも？

いや、そういうことではなくて、私が学位論文を書き終える前に、ある人たちが手紙で「君が書いていることはわかっている、気をつけることだ」と書いてきた。私にはどういうことなのかわからなかった。彼らの頭の中には、子供の頃から聞かされたことしかないわけだ。

—— でもそれと同時に、彼らがそのように反応することは当然でしょう。

それこそ私が彼らに言いたかったことだ。彼らは子供の頃からずっと「あの人はこういうものだ」と言われてきたけれど、突然知る由もない他の観点を見出したということになる。それは彼らには多少ともショックだったろう。

—— それは彼の人となりについてのことなのか、或いは彼の一族についてのことなのか、どちらです？

特に人となりについてだ。私自身は「人となり」に基づいている。その後で家系にまで広げることになるけれど、それについては彼らは話題にはしない。というのもそれは彼ら自身の家系にも関係してくるからだ。とにもかくにも、彼の人となりや、植民者との関わり、植民地政府との関わりなど、それに彼がここでイタリア人女性との間に子供をもうけたという事実も入れておいた。年寄り連中はそれを知っていたけれど、若い連中は知らなかった。彼らはここにいた者たちのことは考えないで既に遺産を分けていたんだ。いずれにしても、ここにいた人たちはアンジュアン島にいた連中のことを無視していたし、彼らは何ももらえなかったけれどそういうことだ。[コモロの]人たちは幾つかの事柄を発見したが実際には認めたくなかった。

—— つまりあなたは、真実を知りたいというタイプの人間なんですね。

本当の歴史をね。

—— 本当のところ、そういう歴史にぞっとしませんか？

いいや、何故ならそれは...

—— 何故なら、我々の先祖たちが語ってきた歴史にうっとりしたい人たちがいるから。

みんなそうだ。でも、我々をうっとりさせて、そのまま残った方がましかもしれない。そして、これが「歴史」なんだと思うわけだ。我々の一族で学んできたすべてについて、それが歴史ではないことをみんなよくわかっている。我々の一族ではみんながスルタンだったことになっている。

—— そう、その通り。

それに、もし本当に調べたらシャリフ [太守] の数は減るだろう。私はよく冗談を言うのだけれど、多分神はこの国を本当に愛しておられる、何故ならすべてのシャリフをこの国に集められたから！ それにしても数が多い。コモロには本当に多くのシャリフがいるものだ。みんな「預言者」の子孫だと本当に思っている！ ところであなたの仕事を何か手伝えるだろうか？

(小田) 勿論。

何についてだろう。私は歴史しかやっていないので。

(小田) 年代記について...

—— 年代記のレベル、或いは歴史の中で理解可能なハディシ [物語] のレベルで、というのもあなた

は実際には歴史の方に傾いているから。確かに、我々がそれらを集めた時にはなかなかいい物語があったけれど...

私はそれは含まれ得ると思う。スルタンを巡ってあなたたちに語られたことはすべて、最終的には民話なのだから。但し大抵の場合、それは本当の歴史ではない。人々が自分の陣営に従って受け入れたことだし、もし彼らがサイド・アリ側だったり、或いは...

—— そう、それなんです。実際、人によってはどちら側についているかで、とても違っています。

同じものであるはずがない。しかし興味深いのは、彼らがどうやって歴史を示しているかを見ることだ。本当の歴史ではないものを彼らがどうやって示すのか、それはいつも見ていると興味深い。潤色したり、作りごとをいれたりして彼らがどうやって示すかをね。それぞれが戦略を持っている。何というか、コモロ社会の中で自分を位置づけるための戦略を。だから、歴史が好ましくない場合は、それを示そうとはしない。

—— 歴史が彼にとって好ましくない場合ですね。

そうすると潤色して好ましいことを付け加えてしまい、真実を語ろうとはしない。現実には、サイド・アリはスルタンが遺言を残したと称してバンバオで権力を掌握したが、今日の歴史家たちは、その遺言が偽物で作られたものだということではほぼ意見が一致している。

—— それは実在するのですか？

フランス人たちが19世紀の終わりに「この子供が相続人である」とするその遺言を明らかにした。ところが実際にはスルタンはその子供のことを知らなかった。その子供はアンジュアン島出身でマヨット島に連れられて行きそこで育った。彼はそこで教育を受けた。それで、何故スルタンが「この子供が相続することになる」などと言ったのかがよくわからない。アンジュアン出身の父親なのにンガジジャ島で相続しようというのだから。しかも、そこでは彼よりも権利を主張できる他の相続者たちがいたにもかかわらず。

—— ではそのことをどうやって説明しているのですか？ 何故最終的にそんな風になってしまったのでしょうか？

理由というのは、彼の父親がサイド・オマルだったからだ。サイド・オマルはマヨットをフランス領にさせてしまった。それに、私が思うにはその頃、フランス海軍はンガジジャ島にも誰か〔協力者が〕いることを望んでいた。だからその遺言というのはフランス海軍が捏造したもので、その後で「ほら、これがバンバオのスルタンになるべき人物だ」と言ったのだと私は真剣に考えている。そうして、彼が全島のスルタンになるのを援助したのだ。

—— 私は多くのコモロ人がそういうヴァージョンは聞きたくないと思います。

特に、サイイド・アリの家族はね。そう、確かに奇妙に思えるだろう。でも彼はサイイド・オマルの息子だし、サイイド・オマルはエージェントだった。括弧付きのエージェントとでも言うべきだろうが、当時はエージェントとは言わなかっただろうね。しかし、フランスがやって来るのを実際に許したのは彼だ。彼はマヨットの諸権利を持っていたアンジュアン島の従兄弟を説得してそれらを譲らせた。私はあなたがこういう歴史を認めるかどうかはわからない。でも事実、コモロ諸島というのは、フランス人がノシ・ベ [マダガスカル北部の島] を失って、その辺りに足場を必要としていたのでその代わりだったわけだ。だから彼らはマヨットをたまたま見つけて、海軍がやって来て、この場所はよろしい、となった。それで彼らはマヨットを占領しようとしたが、権利は一人のマダガスカル人に取られていた。そこで彼らはそのマダガスカル人をあらゆる方法で説得して売ることを強いらせ、結局彼は売ることになる。

—— フランス人に？

フランス人にだ。ところが実際には何にもなかった。彼はたまたま、一年後にアルコールのせいで死ぬことになる。たまたまね。ところが彼が売りに出したときにアンジュアン島のスルタンが拒否してフランス王ルイ=フィリップに書状を送る。彼はこう書いた「彼 [マダガスカル人] はその島を売ることは出来ません。何故ならば、その島は私のものだからです。私はそれを祖先たちから受領したのです、それに...」

—— マヨット島？

そう、マヨットだ。アンジュアン島のスルタンのものだった。それでルイ=フィリップは...

—— それではその頃は、まだコモロ諸島は連合ではなかったのですか？

いやそうだった。アンジュアン島のスルタンがそう言ったということだ。彼は「この島は私のものだ。私はそれを自分の祖先たちから受領し、神から賜った」と言ったのだ。彼はフランスの王にそう書いた。そこでフランス王は 1841 年に売却を止めた。

—— なるほど。

1841 年から 1843 年までの間、彼らはアンジュアン島のスルタンに彼の権利をフランスに委譲するよう説得しようと試みた。そこで、サイイド・オマルが彼のアンジュアン生まれの従兄弟に、マヨットをフランス人に譲るべきだと説得する。そして 1843 年にフランス王が売却が有効であると認めた。

—— 売却はマヨットだけでしたか？

マヨットだけだ。それは1843年のことだった。しかし、1841年から1843年の間は、売却はフランス王によって有効であるとは認められなかった。アンジュアン島のスルタンから書状を受け取ったからだ。

—— どういう内容の...

「この島は自分のものだからだめだ」と書かれたものだ。それから書状の中で彼は「コモロ人の国家が存在している」と書いている。私は実際には〔国家という語を〕引用符付きで引いているが。彼はアンジュアン島と、マヨット島を幾らか掌握してだけなのに「コモロ人の国家が存在している」と書状の中で書いている。まあ、それだけでフランス王が売却を認めることをためらわせるのには十分だった。

—— そうすると、背後にはサイド・オマルがいて、彼がうまくやったと...

彼が従兄弟を説得するのに成功したわけだ。それで、それ以来彼はフランス人と仕事をするようになったが、1890年に従兄弟からアンジュアン島を追い出される。彼が裏切ったと言うことで。何故なら、彼のせいで自分がフランス人にマヨットを移譲する羽目になったからだ。それで彼をアンジュアン島から追い出し、彼はマヨットに身を落ち着ける。サイド・オマルのことだ。

—— サイド・オマルですね。彼はマヨットに身を落ち着けた。

そうだ。そしてマヨットはフランスのものになった。それからまた、彼をモエリ島に押し付けようとした。彼をモエリ島の女スルタンだったジウムベ・ファティマと結婚させようとしたのだ。

—— そうなんですか。

結婚させようとしたがうまくいかなかった。と言うのもジウムベ・ファティマが受け入れなかったからだ。彼は恐らくモエリ島に一年とどまったが、それからまたそこを出た。女スルタンがまったく彼に関心を示さなかったからだ。それにしても結婚とはね。フランス人たちはモエリ島にも地歩を固めようとしていたのだ。その後彼はンガジジャ島で結婚する。

—— そうすると、そこから出たんですね、モエリ島から。

彼はンガジジャ島で結婚した。ンガジジャ島のスルタンの娘のひとりとね。そして彼の息子がサイド・アリになる。彼はバンバオを相続してからンガジジャ島全体を掌握する。フランス海軍の協力だね。

—— それは面白いですね。というのも我々が聞いた話、それはコモロ語だったのですが、小田さんはわからなかったけれど、全然違うもので...

勿論だ、それぞれが自分の立場に従って、そうあってほしいという歴史を語る。興味深いのは、それらの話を比較することだ。サイド・アリ側から何が語られるのか、イツェンドラのスルタン位の側からは何が語られるのか。それに、それぞれのヴァリエントを検討するのも興味深い。それらは必然的に同じものではない。それにしばしば、実際には歴史でもない。各自が家族内で聞いたこと、また家族の中で伝えられている伝承を語り、彼らはそれが歴史だと思っているというわけだ。

(小田) それはややこしい事態ですね。

—— 多少とも。

そう、特に歴史家にとってはね、でも文学分野の人にとっては、文学的な着想として捉えられる。歴史家にとって少々ややこしいのは、その後で細かく分析をして、語られたシーケンスを吟味し、何が隠されていて、何が語られていないのか、前景として何が置かれているのかを考察しなければならない。それに、あなた方が聞いているときに彼らが話している中には空白の部分がある。彼らがどうしてそっちからあっちに何の仲介もなく過ぎてしまうのか、つまり幾つかの事物がすぐに取り除かれてしまうのかがわからない。

—— それでも歴史の中の幾つかの時期で、何というか、何もない時期は必ずあるのでは...

何もない時期？

—— 何もない時期です。コモロの歴史で何もない時期が必ずあると。

7世紀には実際上何もなかった。現実からね。7世紀には実際何もなかった。だから人々は話を粉飾せざるをえなく、物語の中で粉飾する。ジン [魔物] や、島々に住みにやってきたありとあらゆるものについて話をこしらえる。何しろ知らないのだから。

—— その後は、さっき言ったように、各自が信じるか信じないか。

そう、しかし時々は...

—— それは最終的には自分次第ではある。

ところでしばしば、民話、或いはハレ [物語] の中で、ジンがここにやってきたといった歴史を語る際、そこでは実はひとつの過去を喚起しており、その頃人々はまだイスラム化していなかった。

—— ええ、そうです。

大陸からやって来たアフリカ人たちを異教徒と見なして、彼らをジンと呼ぶわけだ。時々。実際、非常に古い過去に言及する時、彼らはジンとして示される。彼らは人間ではない、何故ならムスリムではなかったからだ。

—— しかし、イスラムそれ自体がコモロに伝えられたのは...

10世紀頃だと私は考えている。ところが、《預言者》が世に出てすぐだという人もいる。まあそれは伝説でもあるけれど、あなたがそれを聞いたかどうかは知らない。実際言っているのは、《預言者》が世に出て間もなく、二人の人物がヌツァエニから出発して彼に会いに出かけたが、サウディ・アラビアに彼らに着いた時に《預言者》は亡くなっていたというものだ。

—— 彼らがそこに着いた時に...

《預言者》が亡くなっていたことを彼らは知った。そこで、一人が戻ってイスラームを広めた。

—— そうですね。となると10世紀よりも少し前になりますね。

そう、ただそれは民話の中での話になる。ヌツァエニに彼の墓がまだあるという話だけれど。

—— その人のですか？

そう。

—— 名前はわかっていますか？

わかっている。

—— ヌツァエニ出身の。

そう、ヌツァエニだ。ということで、植民地期の歴史から本当に離れてしまうと、実際は伝説やら歴史やらそういうものすべてが混ざってしまう。当分の間は、そこから離れるのは難しい。その後で、歴史の考察をやっと始められる。書かれた文書があるからね。そして、それが確定した時、何とていうか、苦労することになる。人々が言っていることに気を付けなければいけないからだ。しかし少なくとも文書が確定すれば、色々と変えることがずっと容易になる。確定されなければ困ったことになり、歴史や伝説や民話をごちゃごちゃになってしまう。興味深いのは、違いを分析することだ。人々がどのように思い返しているかを。私は歴史研究者なので、それが真実かそうでないかを追及しなければいけない。でもあなたは文学分野だから、真実かそうでないかは別として、人々がどのように語り、何が彼らの戦

略なのかというような「美」を多分求めるのだと思う。しかしそれは歴史家と同じ仕事ではない。私はそれらの中に真実を求める。多分それで私は物事をややこしくしているのだと思う。でもあなたは文学側で、美しさ或いは、彼らがどのように語るかを分析し、違いを考察する。私はそう思っている。それは歴史家と同じ仕事ではなく、何故ならば、私は資料を作ったり、村に行く時こう尋ねる「この誰々さんはあなた方にとってどういう人でしたか?」。そして彼らは私に語る。それから私は別のの人に会いに行って、彼が語る、また別の人のところに行って彼が語る。どれが一番よく出てくるヴァージョンかを見るためにちょうど真ん中を探さなければならない。そしてそれが恐らくは真実だと思われ、今度はそれを書かれた文書やすべての言説と共に確認しようと努める。私が思うにはあなたはこの種の問いかけはしないのではないだろうか。文学の側にいるのだから。彼らは民話、ハレなどを語り、彼らがどのようにそれを語るか、或いはその背後に何があるのか、それがすべてだと思う。結局はそれがすべてであり、既に複雑なものだ。それは同じ仕事でないと思う。複雑ではあるけれど同じ仕事ではない。でもほら、民話の中でも幾つかの時代が出て来るだろう。ジンも実際に出て来るが、それはコモロ語で「ウディング（無知）」と呼ばれるものを示している。だから本当に... 彼らはイスラムが来る以前は何であろうとやっていた。その後で、他の時代「ウスターラブ（アラブの）」が出て来る。その語の中には「アラブ」という語が入っているので、それはイスラム、つまりアラブ人たちの到来後であり、彼らが文明をもたらしたのだ。ウスターラブ（アラブ性）、それは文明と言える。民話の中にもしばしばそれが...

—— 今おっしゃったように、[歴史と文学は] 同じ仕事ではありませんし、それは時代にそれほど基づかないからでしょう。10世紀のハレでも、20世紀のハレでも語る事が出来ますからね。だから、その種の問題はないというのは本当のことです。一方あなたの場合、時代に基づくのかそうでないのかどちらですか？

あなた方はそれらの時代がわかるだろう。実際、私が言いたいのは、あなた方がそれらの時代をわかるということだ。変化も見るとわかるだろう。例えば、サイイド・フサインの年代記、彼はスルタンの一人だったが、生きていたのは..

—— どこでその年代記を見つけられるのですか？

それは出版されている。サイイド・フサインの年代記だ。どこかは知らないが、何かの雑誌の中で。シャマンガに頼んだらいい。彼がどこでサイイド・フサインの年代記が出版されたか知っている。サイイドの年代記はジンから歴史が始まり、それから徐々に、アラブ人とイスラムの到来と共に文明に至ることを示している。

—— あなたの様な歴史家は結局はジンたちの時代というのを信じていないのでは？ それは多少とも伝聞めいたことでは。

いや、信じている。それが何を意味しているのかを知っているから。

—— 前にあなたが言ったように、ジンというのはある意味では異教徒だということですか。

そうだ、私はそう解釈している。この種の解釈に至らざるを得ない、そうでなければ... いずれにしてもジンというのはクルアーンの中にも書かれている。クルアーンの中に書かれている、ということは我々の世界にも存在しているということだ。とにかく解釈としては実際、それ以外にはない。結局それはムスリムではない人々のことであり、彼らは何でもしたい放題だった。だからそれはしばしば地獄と結びつけられ、それはクルアーンに書いてある。コモロ語で何と言うかということ「ジャハナマ」で、当時はよく「これらの人々は地獄だ」と言われていた。ところであなた方は歴史的な物語はたくさん集められたかい？

—— まあ、結局はそれだけだったのですが。

「それだけ」というと？

—— 結局は、それだけでした。ここパリで。小田さんはマルセイユにも行ったので、あちらは少し違うと思いますが。パリには先月彼がいて一週間の中に何人かの人たちに会ったのですが、今週も事情は同じで、ハレ [民話] を語ってもらうよう依頼したところ、彼らは断固として歴史から始めるのです。時代をごちゃごちゃにして。ある時はサイド・アリだったり、モエリ島の王女だったり。みんなこんな感じでごちゃごちゃですが、それ自体としては一貫しています。彼らはハレを語る事が出来ないというか...

シャマンガがあなた方に言ったと思うけれど、ハレというのは結局は歴史的な物語なのでは？

—— 実際彼が私たちに言ったのは、ハレは、何と言うかフィクションの次元を含んでいるということです。それが真実かそうでないかと問うことは結局は出来ないというのは本当なんではないでしょうか。ハデイスを語ってほしいと頼んだ場合、それは現実の話でしょう。それが歴史ということになります。

そうだろうか。

—— そうでしょう。

私の印象では、あなた方がハレを語って欲しいと頼んだ時、彼ら自身はそれを「歴史」だと思っている。

—— それについては今お話ししたばかりだと思うのですが、私は民話を語ってもらいたいとわからせるのが難しいと感じていました。というのも、どうしても歴史になってしまうからです。その一方で彼らが私にこう言います：「ハデイスを頼んではいけない。何故なら、ハデイスは歴史だから、ハレを語ってほしいと言わなければいけない」。ハレというのは...

そう、私もそのことを言った。実際のところ人々はハレという語を多分「昔」と捉えているのだろう。

—— はい、恐らくは。

恐らくはね。それで彼らはサイド・アリとかの歴史を語るわけだ。多分。

—— かれらは「ベタンベ」については多く話してました。シャマンガは我々に、それは民話ではないと言ってましたが。

それは詩かい？ 或いは短い奇譚のようなもの？

—— 逸話の類です。それでその逸話を除けば殆どの場合、誰その一生を我々に語るわけです。

—— 結局のところ、それは理解するのは難しいだろう。それをわかっている人はごく僅かだ。恐らくアブデル・アマン、彼ぐらいだろう。そういうややこしい状況では仕事も難しくなる。それであなたは[民話を]集めて翻訳し、出版するわけだ。それ以上の研究はするつもりですか？ マダガスカル語のコモロ民話、マダガスカル語のマヨット民話というのがある。

(小田) それは本当ですか？

確かにある。それが彼の博士論文で、確か2、3巻のものを出している。

—— 小田さんは今週には発つのですが。

では次に来るときにでも。彼はとても面白い人間で、民話のことについて話してくれるだろう。

—— 民話を集める難しさ以外で私は気づいたのですが、会うことができたコモロ人のすべてがとにかく喜ぶのが..

語ることなのか、聴くことなのか？

—— 私は聴く方が楽しいのですが、彼らは語るのが楽しいようで、いつも...

何故なら、今では滅多に機会がないからだろう。コモロ諸島でさえ民話なんかもう聞くことはないし。私の祖母は語ってくれたけれど今ではもうない。

—— 私の祖母も語ってくれました。でも一つも覚えていません。しかも、それはムブナフィアの本当の民話だったのです。すべてが。でも私は覚えるほど頭がよくなかったし、今ではまったく語られてい

ません。

もう一人、多分民話について知っているのがイブラヒム・バルアヌだ。

—— イブラヒム？

バルアヌ。彼もモロニ出身だ。

—— 彼はパリにいますか、或いはコモロ？

彼はパリにいるよ。

—— イブラヒム・バルアヌですか。

彼は、私が思うにもっと色々しゃべってくれる。頭に入っていると思う。

—— バルアヌ一族の出身ですか？

そう、最も若い家長の一人だ。でも小田さんにはまだ時間があるのかな。

—— 何でしたっけ？

あなた方に時間があるのなら行ってみたらどうだい、ということだ。